

也、

〔奥儀抄下〕さきだ、ぬくゐのやちたびかなしきはながる、水のかへりこぬなり
是はむかし、あひしれる人にをくれたる男にやれる歌也、逝水不返、後悔不立前といふ事のある
也、うせにし人にさきだ、ぬを後悔さきにたぬによせてくるたる也、行水のかへらぬやうに、
又くべきならねば、やちたびくふるとも、かひやなかるらんとよめる也、

〔日本書紀欽明十九〕十四年八月丁酉、百濟遣上部奈率科野新羅下部因德汶休帶山等、上表曰、中伏願

〔太閤記三〕信長公御葬禮之事

秀吉永き夜のねざめに、昨友は今日の怨讎と成、前榮は後衰と移り易りぬ、誰有て期來日乎、厚恩
を報せずして、衰ふる身となりなば、噬臍とも益なかるべし、

〔沙石集三上〕忠言有感事

心アル人ハ感涙ヲナガシケリ、ハルカニ承ルモ不覺ノ涙禁ジガタシ、マシテツノ座ノ人サコソ
感ジ思侍ケメ、カ、リシ人ニテ、子孫イヨク繁昌セリ、情ハ人ノタメナラズ、道理誠ニ思知レ侍
リ、

〔萬葉集十三〕相聞從古言續來口戀爲者、不安物登、玉緒之繼而者、雖云處女等之、心乎胡粉、其將知、因之無
者、夏麻引、命號貯、借薦之、心文小竹、荷人不知、本名曾戀流、氣之緒丹、四天、

〔源氏物語二十四〕胡蝶右大將のいとまめやかに、ことごとくしきさましたる人の、こひの山にはくじの
たうれ、まねびつべき氣色にうれへたるも、さるかたにおかしと、みなみくらべ給ふ、略下

〔土佐日記〕八日承平六ある人いさ、かなるものもてきたり、よねしてかへりごとす、をとことど
もひそかにいふなり、いひぼしてもつると、や、かうやうのこと、ところごとく、にあり、